

三渡幸雄著『カント哲学の基本問題』（序八頁、凡例一頁、目次二二頁、本文二三八一頁、索引、文献四七頁。同朋舎出版、昭和六十二年刊。）

限元忠敬

本書は、その生涯をカント研究に打ちこみ、昭和三十二年以來大部のカント研究書六冊を世に問うた著者三渡幸雄氏が、積年の研究に基づいて、改めてカント哲学の基本問題を問い直すとともに、従来看過されてきた重要問題を掘りおこして、カントの原像に迫ろうとした著者畢生の力作である。著者のカント研究の基礎的観点については、すでに三十年前の処女作『カント批判哲学の構造』（学振、昭和三十二年）の冒頭において、「謙虚にその原典に準拠して、カントの真意と真面目とを正しく深く理解」することによって、「批判的精神のもつ中道的的相関構造」を把握し、これに基づいて従来の多くのカント解釈を止揚統一にもたらし、批判哲学を「学としての形而上学」として、さらに「主体としての形而上学」として把握することをめざすものと言明されている。この主張を受けて、著者は本書の「序」において、カント研究は単にその学説の理解と解釈に終

るものであってはならず、むしろカントの「哲学する」精神に参入して、その哲学の本質構造を究明すべきものであり、かくてその「基本問題」を提示し、それを「批判的精神のもとにカントと共に *mit-philosophieren* する」必要があると言う。著者によれば、カントの問題はもとよりその著作の中に数多く埋蔵されているのであり、研究者はこれを自らの「問題意識」のもとに、とりわけ「現代の問題意識」において掘りおこして解明しなくてはならないのである。

このような観点から、著者は本書においてカントの基本問題を三部に分けて論究する。

第一部 カントの「理性」の問題

第二部 カントにおける「他人の存在」の問題

第三部 カント研究断想

一

第一部「カントの「理性」の問題」は、序論「カントの「理性」についての問題点」と本論「カントの「理性」についての論究」とから成る。

序論は「理性」についての問題点として五つの項目——一 理性における批判主義、二 理性の新しい形而上学、三 理性の構造と限界、四 理性の自由、五 理性に対抗するもの——を挙げる。著者によれば、カント哲学においてまず問われるべきことは、「理性はいかなる立場に立っているか」、その立場においていかように考えられているかということである。ここから、

著者は、カントの理性が近世ヒューマニズムの伝統を継ぎ、啓蒙主義の立場から出発して、これを越え、合理論と経験論との「真の中道」に立って批判の立場を確立し、「先験的観念論」に至ったとする。カント自身はこのような批判を新しい形而上学の「予備学」と称するが、著者によれば、それは単なる予備学に尽きるものではなく、その真意においては、「人間とは何か」を究極的に問うところの、人間を軸とする人間理性の自覚的にして「学的な」存在論である。この観点を論明するために、著者は一方で、理性の認識作用の構造を追求してその限界を確立するとともに、他方で、理性の自由を追求して道德における、「自己立法」と「徳の義務」とを明らかにする。ところが、この作業のおのずからなる結果として、理性は自己に対抗する「非理性的なもの」、「超理性的なもの」および「反理性的なもの」に直面するに至るのである。理性はこのようなものとの対決を通して、新たな問題を解決し、統合への道を開く。

このような理性の問題は、長年にわたるカント研究を通じてその全体像を把握した上で、著者の洞察であり、以下本論においてこれが詳細に展開されるのである。

二

本論は二つの論究を含む。第一論究「理性の本質構造」は、理性をカント哲学全体から見通してその本質構造を分析しようとするもので、八つの章——先験的哲学と形而上学、二 理性の一般的在り方、三 理性の「哲学する」作用、四 構想力

と理性、五 統覚の認識論的構造、六 自体的存在と理性の諸立場、七 可想界の構想、八 人間存在——から成る。著者によれば、カントにおいては理性は哲学を建設し、逆に哲学は理性を解明するのであって、この関連を軸にしてその特性を探究すべきである。されば、批判・先験哲学・形而上学の関係についてのカントの錯雑した論議もこの観点から統一的に捉えるべきものであり、三批判全体の統一的把握もここに基づいて有限的人間の存在の自覚に到達すべきである。もともと人間存在は自然存在と神存在との間にあって、中間的——媒介的——綜合的機能を有する媒介者として、世界の合目的的連関の中核をなしており、ここに「最高観点の先験哲学」が自らを定位するとされるからである。

著者のカント研究の特性を端的に示しているのは第四章と第五章である。著者によれば、カントの構想力論の獨創性は、理性が構想力を内含し、かつ構想力に媒介されているという構造にある。構想力はもとより経験的にも働くが、その本質においては純粹作用ないし先験的（先天的——綜合的——超越的）作用であり、純粹形象や先験的図式を形成し、空間・時間の純粹直観の根源的根拠をなすものである。人は、構想力のこのような先験的形成作用の中に理性の深い根源をうかがうことができる。

著者によれば、純粹理性は本来自由に基づく形成的自覚作用であり、その自覚の点において純粹統覚の自己直観として働き、その形成の点において構想力の自由な自己形成的表現作用として働くのである。統覚と構想力は共同しあい、補充しあいつつ、

統覚は構想力を知性化し論理化し意味を与える反面、構想力は統覚を直観化し時間化し形象を与えるのである。

しかし、著者によれば、統覚はさらに認識の中心能力として勝義の理性であり、深く可想界に侵入して、そこに根源する。

こうして統覚は先験的理念として作用するのである。しかし統覚の働きはそれに尽きない。統覚はさらに実践的には自由主体の自覚的作用として働くのであって、これすなわち人格としての根源の主体的作用として、道徳的人格である。かくて、著者によれば、認識論における認識主体としての理論的な先験的統覚は、実践面においては道徳的人格として形而上学への道を開き、道徳的・宗教的理性の可想界へ侵入するのである。

こうして、著者はさらに可想界の構造を独自の視点から詳細に分析・論述する。可想界はもとも現象界に対立し対応する超越の世界である。著者によれば、理性はこの可想界から発現し、可想的能力として現象界に躍り出て、これを限定するとともに、逆に自己の根源たる可想界に統制的原理を投入して、先験的理念として想定する。また、実践的には道徳法則を立法して、意志をこれに聴従せしめて徳を実現し、かくて現象界の働きを限定する。このようにして、理性によって可想界から現象界への限定と、現象界から可想界への逆限定がなされる。ここからして、人間自身も理性をその本性とすることによって、現象的人間と可想的人間との異次元的二原理を綜合統一する存在であると考えられるのである。

第二論究「理性における哲学の諸問題」は、第一論究の全体

的観点に対応して、個別的視点から問題を提示し、五つの章——カントの「理性」にかかわる諸問題、二—カントの「理性」が反対するもの、三—カントの「理性」とヤスパースの実存理性、四—カント哲学における伝統と独創との交差、五—カント哲学研究の意義——から成る。とりわけ第一章における、理性に関わる諸問題の把握の仕方には、著者のカント研究の独自性を明瞭に看取することができる。著者はまずカントの「経験」の概念を取りあげて、第一批判におけるそれを知覚的経験、予料的経験、可能的経験として分析し究明するとともに、さらに進んでこれを実用的視点、文化的視点、なかならず道徳的・宗教的視点において論究する。次に、著者はカントの「理性」に「自己直観」の作用を指摘して、これを現象学的本質直観として捉え、これが、全体を総合的に直観する綜観的本質直観と、自らの構成要素を部分的に直観する分観的本質直観とを含むと見、さらに本質直観を視覚型と聴覚型とに区別する。第三に「道徳法則」に関して、著者は「定言命法」を基本として、そこから五つの「範式」への特殊化の展開を明らかにするとともに、さらにこれを具体化する「徳の義務」を詳細に論究し、カントの道徳的行為が類・種・個の相互限定関係において実現されるゆえんを論明する。第四の論点たる「根本悪と神性」に関する著者の論究はとりわけ注目すべき洞察を含んでいる。著者によれば、カントの宗教論は道徳から始まるが、しかし道徳と同次元に位するものでもなければ、宗教の道徳化ないし道徳の宗教化というべきものでもない。むしろ、それは人間の根本悪

からの超脱に関して、「心術の革命」と「道徳的信仰」を通じて、義務の命令を同時に神の命令として自覚し確信して、神の幸福にあずかつて救済される道である。こうして、著者はカントの神観についても、先験的理念としての神を最高善の要請理念に昇華させた上で、さらにこれを悪人救済の生ける人格神として捉えるのである。

以上第一章において、著者はカント哲学の重要問題の検討を通じて、カント解釈の基礎的な視点を明らかにしたところを受けて、第二章においては、カントの「理性」が反対するものとして、「先験的独在論」、「経験論と独断論」、「理念・合目的性の原理の構成化」を挙げ、第三章においてはカントの「理性」とヤスバースの「実存理性」との対比をなし、第四章においてはカント哲学における伝統と独創の交差するところをギリシアから近世に至るヨーロッパ思想の発展との関連の中で明らかにする。そして、最後に第五章において、このような特性をもつカント哲学を研究するいくつかの意義を考察し、結局すべてを「人格の現成としての哲学」の観点に収斂せしめている。

三

第二部「カントにおける「他人の存在」の問題」は、第一編「他人の認識」と第二編「他人の実践」の二つの編を含む。著者はこの問題をヤスバース、ブーバー、フッサールを介して、すぐれて現代的な問題として取りあげ、カント哲学の全体を踏まえてこの視点を掘りおこし、綿密な考察を加えていく。二つ

の編は「他人の存在」の二面として、論旨の展開が平行せしめられており、理論と実践のいずれにおいても「事実問題」と「権利問題」を区別して解明した上で、前者から後者へと進みゆく。すなわち、「他人の認識」における「事実問題」は、経験的意識において他人がいかなる条件の下で認識されるかを明らかにし、「権利問題」はこの経験的意識の先天的根拠を求めて、他人の存在の認識の可能性を論明する。他方、「他人の実践」における「事実問題」は、実践的経験的意識における他人の存在の条件を求め、「権利問題」は、その道徳意識の構造を自己の道徳的意識から論究し、「私と他人」との道徳的関連の根拠を追求する。

第一編は五つの章——経験的意識における他人の存在、二 身体の構造、三 先験的意識における他人の存在、四 他人の実在、五 人格における自由と価値——から成る。この中で著者が特有の観点を提示するのは第三章と第四章である。著者によれば、「他人の存在」は経験的に認識されるのみならず、先験的原理によって構成されて「現象的実体」として捉えられる。したがって、この場面においては「私と他人」は「実体の実在の相互性」の關係に立つことになる。さらにこのような他人の認識の可能性の根拠をなすものもとより「先験的統覚」であり、それは「私と他人」との関わりの原理としては「相互統覚性」として考えられなくてはならない。ここに至って「私と他人」との共存の場が開かれるとともに、この共存が相互自覚と相互照応の関わりに進展するに及んで、「私と汝」の關係の場

が生じ、今や汝は「私の鏡」として、「人格としての汝」の認識が成立するのである。

第二編は五つの章——実践的・経験的意識における他人の存在、二 道徳的意識における他人の存在、三 世界公民性と国際的友情、四 幸福における他人の存在、五 実践的行為の状況——から成る。この中で特に注目すべきものは第二章と第四章である。著者によれば、「私と他人」の実践的關係は経験的意識を越えて道徳的意識の中に求めるべきものである。カントの道徳論は単に個人の心術の問題にとどまるものでは決してなく、はじめから「私と汝」の人格關係の上に立っている。そして、かかる人格關係は単に形式的普遍妥当性として捉えられるのではなく、その具体的な在り方は「徳と徳の義務」として強調されており、これは「友情」に究極する。この「友情」はさらに「他人の幸福」の観点に連なる。著者によれば、カントの幸福論は単に欲求や傾向性の満足に尽きるものではなく、この場面をはるかに越えて、「徳自体による幸福」の意味での「真の幸福」が重視されており、これに応じて友情が徳の中で最高の徳とされ、したがって最高の幸福として捉えられている。この観点はさらに道徳の場面を越えて、宗教における「淨福と永遠の汝」の問題に連るのである。

四

第三部「カント研究断想」は、カント哲学の或る断面と位相に着目して、その究明を通じて批判哲学の本質構造を明らかに

しようとする。これは従来看過されたり軽視されたりしてきた問題点の発掘を含めて、五つの章——カントにおける哲学の概念、二 カント哲学における「同時」の構造、三 認識の進歩と目的性の原理、四 カントの「二律背反」(第一・第二)における無限と単純体、五 カント宗教哲学への道——から成る。この中で特に注目すべきものは第二章と第五章である。第二章は、カントが認識の最高原則において「経験一般の可能性の制約は「同時に」経験の対象の可能性の制約である」といい、道徳の根本法則において「汝の意志の格率が常に「同時に」普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ」といい、また宗教に關しては「あらゆる人間義務が「同時に」神の命令である」といい、その他の場面においてもしばしば使用する「同時」の概念を取りあげ、これを先験的論理の根源にさかのぼって綿密に論究する。第五章は、第一批判と第二批判における神の概念を追求して宗教論に及び、まずそれにおける「根本悪」の由来について周密な探究をなした上で、この根本悪を超越しようとする「心術の革命」を明らかにし、その不転の決断の極限において、ついに不可知なものへの助力を信知する、つまり神の恵みの他方を指摘するに至る。著者はここに同時に「神に嘉せられる人間性」としての「神の子」の意義を結合する。かくて、この章は単に第三部の終章をなすのみならず、本書全体の論旨の究極点を形成するものというべきである。

五

以上が本書の骨子である。本書は、著者の五十年に及ぶカント研究の成果にふきわしく、カント哲学の全体を捉えた立場から、まず哲学そのものの源泉であるとともにカント哲学の基軸をなす「理性」を取りあげて、その根本構造を究明する一方、最近学界の注目を浴びるようになった「他人の存在」の問題に關してすでにカントの中に見出される解答を掘りおこすことによつて、時代を越えたカント哲学の特性を闡明するとともに、従来カントにおいて看過されてきた若干の問題に照明を当てることに成功した。著者の視野はカントの全著作を蔽い、その洞察はカント哲学の根底に徹しており、加えて緻密な分析と透明な綜合によつて著者独自のカント像を形成した。しかも、著者のこのようなカント把握が、伝統的なカント研究をすべてマスターした上に構築された経緯を考え合わせるとき、今やあらゆるカント研究は著者の中に集成され、本書はカント研究の結着点をなすといつても過言ではない。今後のカント研究は本書を素通りすることは許されないのであろう。

しかし、従来のカント研究を見事に総合し止揚した本書は、まさしくその点において論究における若干の過不及を免れない結果にもなった。すなわち、著者が従来のカント研究の中で最も重視したのはコーヘンとハイデッガーであったが、著者は、カント解釈における両極端ともいふべき両者を統一して、先験的統覚と構想力を相即相関的な連関において捉えることによつ

て、前者の自覚の観点と後者の形成の観点とを結合して、カント哲学の相即的な二契機となした。これによつて、先験的統覚と構想力との構造と關係についての従来の争点に解答が与えられた反面において、一方ではコーヘンの尖鋭な自覚の観点が鈍化され、他方ではハイデッガーの心情の深淵が埋められかねない結果になったといえる。さらに細かく見るとき、若干の叙述の重複が目立つ。もちろん、カント哲学の基本問題を種々の角度から掘り下げようとする本書の性質上、必要に応じて同じ論点がくりかえされるのはやむをえないことではあるが、これがいきおい論構の錯雑を招来し、全体の明瞭性を損うに至ったきらいがある。まさに第一批判「序文」のカントのことばのごとく、論点を「それほど明瞭にしようとしなかつたら、はるかに明瞭になったであろうに」といわざるをえない感じをもつ。

もとより、このような指摘は、筆者が書評をなすべき責任の故にあえて穿鑿した小過にすぎないのであつて、本書の学問的価値にいささかも影響するものではない。(了)

(筆者 くまもと・ちゆうけい 広島大学名誉教授)

〔文学部〕、広島工業大学〔哲学〕教授)